

「まこッ！ 早く、サチの陰の気を解放するヨ！」

佐知子の股間にペニスを挿入して、玉門奥に滞っている女の気を吐きださせ、陽の側に傾いてしまった佐知子の身体のバランスを元に戻す。そうすれば、自然と力が相殺されて黒い如意棍の力も弱まる。子供は素早く印を結んで、若者の股間を指差した。

「疾ッ！」

子供の鋭い気合とともに青い炎が飛び、真が穿<sup>は</sup>いているズボンのボタンとベルトのバックルが綺麗に吹き飛んだ。支えを失った真のズボンは、そのままずり<sup>くろ</sup>りと踝<sup>かかと</sup>までさがって落ち、ズボンの下、灰色のボクサーパンツの前の部分からは勃起しきつたペニスが鎌首をもたげるように飛びだしてくる。

「まこッ！ いくヨ！」

子供は真顔で指示を出し、意識を乗っ取られている若者は、佐知子のほうに近づいていく。意識朦朧<sup>もうろう</sup>としている少女。と。真は佐知子の身体をひっくりかえした。

正常位ではなく、後背位で、犬のような体位で佐知子の処女を奪いたい。

いつも佐知子に振りまわされる若者には、そんな欲望があったのかもしれない。

すでにくたくたの少女は、無理やり尻を掲げさせられても、なんの抵抗もできない。ただひらすら突貫を待つのみである。そして、佐知子の尻の後ろに、若者は膝を立て

て腰をおろした。

——な、なに……。

いったい次になにが起こるのか。佐知子は薄目を開けて振りかえった。

「あ、あうう……」

佐知子の尻の前には、なぜか友人がペニスを出してしゃがみこんでいる。そのペニスの先が狙っているのは……。

「だ、だめ、せ、セックスは、あ、ああ、いや……待って、待って！」

少女は股間からだらだらと愛液を垂らしておきながら、そのようなことを言った。興奮しきり、膣蜜を噴出させた人間が、いまさらに拒絶を口にするのは矛盾しているというよりは、滑稽こっけいであっただろう。否。少女の叫びは少女の叫びであって、少女の叫びにあらず。佐知子の唇を借りて叫んだのは、黒い如意棍の意識であったのだ。それがわかつているからこそ、誰も佐知子の悲鳴に耳を貸さず、そこで緊急手術がはじまった。

びと……。

若者のペニスの先端が佐知子の肉厚で、惨めに歪んだ女陰の上にあてがわれる。つい先ほど黒い棍棒が入りこもうとした少女の聖域。如意棍によって穿ほじられた肉孔は、

充分すぎるほどに緩みきり、その内側のピンク色をした粘膜が外側からもよく見取れた。

「あ、ああ、ああ、だめ、だめだったら……」

佐知子は涙を流し、それでも黒い棍棒をしごきつづけて言った。快感に蝕むしばまれた業の深い少女。その股間に若者のペニスが押しつけられる。優しい前戯も愛撫もなしのいきなりの突貫。もっとも、そのような遊びが必要ないことはべつとりと汗を噴出した佐知子の股間を見れば、一目瞭然いちもくりょうぜんであっただろう。

「ゆ、許して、それだけは……」

佐知子の唇から小さなため息のような喘ぎがもれ、一方、飛天も若者も佐知子の懇願を聞かなかつた。そして。

ぐぐっ……。

若者の腰が前に前にと進みだす。残酷な突貫であった。だが、それをしないことは佐知子を救うことはできないのだ。過酷な優しさというものがこの世には存在する。

「う、うう……うはッ！」

佐知子は背中を大きく反らした。正岡真のペニス、その先端の亀頭部がずぼりと佐知子の膣に入りこむ。破廉恥はれんちな悦びに興奮しきり、快感に没頭していた佐知子の縦筋



には若者の突貫をとめるだけの力は、もはや残されていなかった。若い牡の銚もが佐知子の閉ざされた肉経を奥へ奥へと突き進み――

「うぐうう……うッ……うはッ、うはあッ！」

佐知子のなかでなかが弾けた。初めての感覚に、少女はエビのように背中を反らす。

「ああ、なかに、なかに入ってくるッ！ ああッ！ 苦しい、な、なかに……なかにいい！」

目を閉じたままの佐知子は、『入ってくる』という表現を使ったが、これは正確ではない。『入ってくる』のではない。『もう入っていた』のだ。若者のペニスは、佐知子の股間中央にずぼりと根元まで突き刺さっている。佐知子が泣こうが喚こうが、彼女の蓄つほみはすでに散らされてしまった後であった。

「はああ、は、あああッ……はああッ！」

佐知子は上気した顔を激しく左右に振った。あるいは少女は膣内の鍵がもともと弱かったのか、それともなにかの拍子で緩くなっていたのか、若者のペニスに突き破られても、出血はみとめられなかった。

一方、黒い棍棒は、苦しげに震えている。少女の子宮内に封印されていた陰の気が

もれだしてきて、佐知子の胎内バランスが変わりはじめてるのであろう。

「まこッ！ もう少しヨ！」

子供は真に発破はつぱをかけ、督励とくれいをもらった若者はときをおかず、佐知子の股間に集中攻撃を浴びせにかかる。

かく、かく、かく……。

ゆっくりと若者の腰が前後に動きはじめ、そこで佐知子は苦悶に眉根を寄せる。

「あ、あがああ、や、やめて、こ、腰をッ……腰を動かさないでええ！」

膣内の禁が緩かったこともあって、佐知子は痛みを感じていない。あるのは奇妙な違和感のみ。

——な、なんなの、こ、この感覚……。

快感にはなりきれぬ快感の萌芽のようなもの。錯乱する佐知子に得体の知れぬ魂を宿した真が非情な動きを見せる。

「あ、あ、そ、それだめ……」

若者が背中から手を伸ばし、佐知子のクリトリスと結合した黒い棍棒を握り、これをがりがりがりがりと無残に擦ったのだ。

「ひッ！ ひいいっ！ ひい……いいいいッ！」